

田沼：現代キューバにおける友情と家族

◆ 講演：第48回現代のラテンアメリカ

現代キューバにおける友情と家族

田 沼 幸 子

編集部註

以下は2017年11月11日に行った田沼幸子氏（首都大学東京大学院人文科学研究科准教授）による自主制作映画上映と講演の紹介、そしてバーチャル対談である。当日はこれまでにないほど多くの来場者を迎え、作品上映時には席が足りなくなるかと心配したほどであった。今回の上映＋講演会に際しては、コメンテータとして研究所所長の林みどり（立教大学文学部教授）から映画と人類学に関する解説があったあと、田沼氏と林の対談が入る予定であったが、時間が押してしまったので対談部分はカットせざるを得なかった。事後に行った両者によるバーチャル対談を以下に収録しているので、上映作品と講演内容をより深く理解するための一助としていただければ幸いである。

上映映画

『Cuba Sentimental』（キューバ・センチメンタル）

60分／カラー／DV／2010年

監督・撮影・編集：田沼幸子 編集助手：レオニード・ロペス 構成協力：市岡康子

音楽：Eduardo Martín 撮影場所：キューバ、イギリス、スペイン、チリ、米国

撮影期間：2007～2008年 完成：2010年

文化人類学の院生として調査のためにハバナに滞在した私（サチ）は、キューバ人の友人のグループに出会った。その後、彼らのほとんどがキューバを去った。イギリス、スペイン、チリ、アメリカ合衆国——たまたまたどり着いた未知の土地へと。私は彼らをいま住む場所に訪れ、撮影し、それをまた別の土地に住む家族や友人たちにみせながら旅をした。キューバ人がユートピア的な夢によって知られる自国を去ることについてどのように感じているのかをカメラで追った。

講演概要

コミュニズムを目指すべきにもかかわらず、現状はそうではないという矛盾を抱えた日常生活のモラル的基盤を、キューバ人たちはどのように築いているのか。社会主義政権という枠内で経済の自由化と格差が進むキューバにおいて、人々がどのような人間関係を営んでいるかを概観する。

結論を先取りすれば、コミュニズムは政治的イデオロギーや生産様式としてというよりも、日常的なモラルティとして機能している。それは特に、友情と家族との関係において現れる。しかし、それを成立させる上で、コミュニズムとは相反する原理と関わらずにはいられないというパラドクスがある。

対談 *Entrevista*

ふたつの〈世界〉の狭間を／で考える

—— Cuba Sentimental と『革命キューバの民族誌』をめぐる ——

田沼 幸子 × 林 みどり

林 大変面白い映像作品と刺激的な御講演をありがとうございました。我ながら陳腐な表現で恐縮ですが、「生きたキューバ」をこれほどヴィヴィッドに感じる経験はめったにありません。来場者数もこれまでに多く、映像作品の上映時には席が足りなくなるかと心配したほど大勢の方々においでいただいて、事務局ともども嬉しい悲鳴をあげた会になりました。改めまして心より御礼申し上げます。

さて、今回の上映会＋公開講演に際しては、私がコメンテータとして少しだけお話ししたあと、本来は田沼さんと私の対談が入る予定でしたが、蓋を開けてみると時間が押してしまって、対談部分はカットせざるを得ませんでした。そこでこの場を借りてバーチャル対談／トークをしたいと思いついた次第です。ご多忙のところお時間いただき、まことにありがとうございます。ではさっそく始めさせていただきます。

社会主義社会の「普通の人たち」と資本主義社会の「普通の人たち」

林 講演会開始前の打合せの席でも指摘したのですが、田沼さんの御著書『革命キューバの民族誌』（人文書院、2014年）の魅力のひとつは、これまで私たちが触れることがなかったキューバの「普通の人たち」の日常的な感覚が、日常生活での言い回しや慣習化された身ぶりや行動といったものをつうじて、解き明かされていることだと思います。

どうしてもキューバというと、革命イデオロギーの規範に沿った行動や物言いをする革命政府の優等生（「統合された」人びと *los integrados*）か、反対に社会主義システムの盲点をつきながら革命政府を出し抜いて生きる「ストリートの」（*de la calle*）人びとの言動ばかりに目が行ってしまう。アカデミズムやジャーナリズムの世界では、こうした人たちに光が当てられてきました。これに対して田沼さんがご研究で対象にしている「普通の人たち」は、〈革命の優等生〉vs 〈革命を出し抜くストリートの人びと〉という二項対立的な人間類型の外側で生きてきた人たちです。

御著書のことばを借りれば、田沼さんが焦点をあてている「普通の人たち」とは、「革命政権の目指す、少なくとも当初は目指してきた方向性に字義通りに従っているがため——つまり、金のためではなく、社会のために働き、質素に暮らし、よき家庭人である——、現在の革命政権が実際はその言うところと行っていることが違うのだと、その存在すべてを賭けて非難しているような存在」である。こうした「普通の人びと」の声を丹念に拾い上げる作業は、アカデミズムやジャーナリズムのなかでステレオタイプ化されてきたキューバ人表象やキューバ系移民表象を疑念に付す、貴重な批判的営みだとも思います。

今回の映画や講演からは、こうした「普通の人たち」の日常感覚からでこそ見えてくる「固有の」感覚が伝わってきました。ここで「固有の」というのは、いうまでもなく資本主義システムに生きる「普通の人たち」である私（たち）の社会的・歴史的な解釈枠組みに則して見たときの「固有性」ということになるわけですが、たとえばそのひとつが金銭の価値尺度のとらえ方の違いです。今の日本では、小学校の時期から「普通の人たち」の学校教育に金融教育や投資教育が取り入れられたり、NISAのように若年層向けの投資ニーズの発掘が進められるなど、官民学一体となった金融経済化が恐ろしいほどの速度で進んでいます。

そうした現状からみると、たとえばキューバでは子どもたちに対して金銭に関するしつけや教育という習慣がないという話には素朴に驚いてしまいます。また日本のお駄賃の話をしたところ、「なんでもお金で買える、というメッセージになってよくない。親は、ただその子どもを送り出ただけじゃなくて、愛する存在、困ったときに助けてくれる存在のはずだ」といって首を振ったというダビッドや、薬学部を卒業したあと就職するまで「お金がどうやってできるか」考えたことがなかったというエリサのエピソードなどにも驚愕してしまいます。

田沼 丁寧にお読みくださり、ありがとうございます。私は初めてキューバに行ったのが1999年で、もう気がつけば18年経っています。しかも現在の夫がキューバ人でして、2009年に結婚して以来ずっと、日本にいながら、日々、キューバ的価値観とぶつかり、驚きながら生活しております。でも若干、慣れてきているところもあります。ですから、今回、ラテンアメリカの別の国を良く知る方でもそこまで驚かれるのか、と伺って、改めて独特な国なんだな、と気付かされました。

お金のことは、そうですね、私もびっくりしました。私たちが子供の頃から当たり前のことだと考えてきたことが通用しないのです。日本では、やはり「一人前になるとは、生活できるだけのお金を稼げるようになること」という前提が社会のいたるところに組み込まれています。ですから、働くようになる前の義務教育、あるいはその前の幼児教育の時点から、「時間を守る」「人に迷惑をかけない」「周りの人と協力する」「自分で考えて行動する」といった指針が、当然のこととして教えられ、評価されています。でも結局、最終的にそれらが誰のため、何のためかはほとんど明言されていません。こうしていつの間にか、それらの指針が普遍的な価値だと思い込むようになっていきます。これらは実は、いずれ従順ないし有能な労働力となる主体化＝従属化へと、それと知らずに向かっているのです。

これに対し、キューバでの教育目標、というか、社会全体の目標は、「社会主義」という制度であるということで、常にすでに明言されています。いつかは貨幣がなくても暮らせるようになる共産主義へと向かう過程であると。資本主義は自国にとっては悪しき過去であり、現在、外部にある脅威であり、悪の根源であるという認識は、子供の頃から一貫して教えられます。だから、挙げていただいたような、大げさにも見えるお駄賃への敵視や、薬学部の卒業生でありながら、浮世離れたコメントが出てくるのだと思います。

林 日々刺激的なフィールドワークの渦中にあるというのは、日常と研究が乖離してしまっている者からするとなんとも羨ましいかぎりです！（笑） それにしても聞けば聞くほどこの対比はおもしろいですね。一般的には、社会主義を教育目標に掲げた社会のほうが、資本主義社

会より身体や思考の規律化が進んでいるように思われがちですが、じつは逆で、資本主義社会のほうが、国民国家への従属的主体化をより巧妙な仕方を実現している。田沼さんがやっておられるように、社会を生きている人たちの日常的な価値観を比較してみると、それがはっきりと見えてきますね。フーコーが述べているように、身体の従順化=主体化=臣民化(subjectificación)は資本主義システムの一部を構成していて、それなくしては資本主義システムは成り立たない。さきほど言われた「人に迷惑をかけない」とか「時間を守る」とか、「自分で考えて行動し自分で責任をとる」など、ほとんど当たり前のように身体化されている規範は、古来からの普遍的な社会道徳や共同体的倫理のようにみえますが、じつは17世紀に生まれた社会・権力構造のなかで資本主義が円滑に発展するべく捏造された歴史化されたロジックにすぎないんですね。それをあたかも普遍的であるかのように感じさせているところに、資本主義システムの狡猾さがあるわけです。

ちょっと話はずれますが、自分でもおもしろいなあと感じたのは、たとえばさきほどの例にしてもそうなのですが、田沼さんがお書きになるキューバの日常生活のエピソードを読んでいると、ふつう人類学で「異なる」慣習について書かれているものを読むときに生じるエキゾティシズム感覚のようなものがまったく生じなかったことです。人類学であれ社会学であれ、自分と全く異なる社会の慣習を読む行為は、えてして描かれている対象をエキゾチックな他者像として消費すると同時に、それと表裏一体となった自己肯定感を満足させる行為となります。

けれども、田沼さんのお仕事を通してキューバを見ると、そうしたエキゾティシズム感とはまったく異質な感覚にとらわれる。対象の「素晴らしさ」を賞讃することにも、また彼らの「無知」を暴くことにも向かわず、むしろ逆に私自身がどれほど資本主義システムを支える情動に浸されているかに愕然とさせられる。読者=私の中で、これまで自明としてきた金銭の価値尺度や慣習が、じつは資本主義システムによってじつに巧妙なしかたで創り出されていることに気づかされます。私たちの思考回路に、再帰=反省的(reflexivo)とでもいいましょうか、そういう作用をもたらししている点も、本書の特徴であり優れた点だとおもいます。これは執筆段階で意識的にとられた戦略的な叙述方針なのでしょう。

田沼 はい、ある程度、意識的にとりました。と言いますのも、私自身、当初は、キューバで日々、言葉もなかなか通じないだけでなく、常識が通用しないなか、非常にストレスを感じて生活しておりました。拙著の序章にも挙げたように、世界のあちこちからきた人類学徒たちも、そうした状況に不平を漏らしていました。ただ、彼らの多くは、世界的に博士号を取るための制限期間が短くなるなか、1年で帰ってしまいます。やっとキューバの独特のスペイン語が聞き取れるようになり、どこで何が買えるか、誰に話を通せば何ができるかが、ようやく分かりかけたという時に去ってしまうのです。

しかも、私が調査していた1990年代後半から2000年代前半までは、現在と違って、まだ、「西側陣営」が冷戦に「勝利」したという感覚が、アカデミアにも強く残っていました。社会主義陣営は、これからどんどん、資本主義化し、政治的にも自由化するだろう、という、今思えば楽観的な見通しがあったのです。このため、従来的人类学が心がけてきた、相手の社会がいくら非合理的に見えても、それを批判するのではなく、共感できなくても理解を試みる、という

原則を破り、キューバの現状をシニカルに描く人類学者も出てきました。しかし、そうした上から目線の批判やエッセイは、人類学者でなくても書けます。人類学者は、そうしてはいけないし、そうしたらおしまいだ、というのが私が在籍していた当時の大阪大学の人類学研究室における指導教員ら（敬称略、小泉潤二、春日直樹、中川敏、2000年より栗本英世）が根底において、共通で持っていた指針だったと思います。それぞれ、個性豊かでフィールドもテーマもバラバラですが。

林 田沼さんが研究調査を始めたのは、西側陣営という概念がまだかろうじて生きていた最後の時代だったわけですね。その後、東西の対立というパラダイムは消滅してしまって、東も西も貪欲に飲み込んでしまう新自由主義という市場中心主義的な一元的なパラダイムがせり上がってきた。こうしたパラダイムチェンジにいかに関与しきれない点、研究者として最も注意深くあらねばならないところですが、最も難しい部分でもあります。

それにしても田沼さんのご研究を貫いている批判断識、研究者自身の立ち位置への絶えざる反省というスタンスが、大阪大学の人類学研究室にその多くを負っているというのを伺って腑に落ちた気がしました。「あとがき」のなかで名前を挙げておられる蒼々たる顔ぶれの先生方の仕事からは、領域違いの私ですら頭を殴られるような衝撃を受けてきたからです。さきほど話題にあがった資本主義的な主体化＝従属化の問題なども、春日直樹さん（現・一橋大学特任・名誉教授）が『〈遅れ〉の思考——ポスト近代を生きる』（東京大学出版会、2007年）で指摘しておられた「オーディット文化」¹の本質を構成しているといえると思います。阪大人類学的なcritical anthropologyの流れは、文化人類学という専門領域を超えた問題意識とつながっていて、とても魅力的です。

田沼 そう言っていただけると嬉しいです。私は1996年に大学院に進学したのですが、この年は阪大の大きな転換期でした。青木保先生が東大に異動するのと入れ替わりに、春日先生が着任されました。1995年発売のアエラムック『人類学がわかる』で拝見し、事前に研究室訪問でお会いした小泉先生が、研究室について「自由です」とおっしゃった通り、フィールドやテーマなど、何も強制されたり否定されたりしない一方で、わからないことは自分（たち）で何とかしなければ、という雰囲気はありました。その年の秋から小泉先生は1年間、プリンストン高等研究所に行かれてしまいますし、春日先生は、人類学の授業でなぜか魯迅の話をしています（笑）² これは大変、と修士一年で同期の木村自さん（現・立教大学社会学部）や研究生で毎週、勉強会をし、ギアツやウェーバー、早逝した人類学者ミシェル・ロサルドの*Knowledge and Passion*を読みました。大学院受験に際し、ICUの先輩方に必読、と言われて読んでいた*Writing Culture*は、同年12月に『文化を書く』（岩波書店、1996年）として翻訳出版されましたが、春日先生を始めとする訳者は当時すでに就職していた大阪大学大学院出身の方々です。

翌年に中川敏先生が着任されると、今度は聞きなれない分析哲学の概念が出てきて困惑します。学部の授業を受講しても、先生が身近な「ゲームの規則」の例として挙げるサッカーや将棋自体、私は分からないと言ったら先生も困ってました（笑） それでも、やはり1996年12月に出版されたばかりの『モノ語りとしてのナショナリズム——理論人類学的探求』（金子書房）は、それまで人類学が非政治・歴史的だったという批判を受け、今度はなんでも「政治」や「歴史」

で説明しようとする当時の人類学の傾向に対し、事例を用いつつ、理論的に鋭く批判する刺激的な本で目からウロコでした。数年先立って書かれた2冊の本『異文化の語り方——あるいは猫好きのための人類学入門』（世界思想社、1992年）と『交換の民族誌——あるいは犬好きのための人類学入門』（世界思想社、1992年）も、学部生向けの授業が元になっていて平易に書かれているのに本質をついた内容で、人類学界限では「猫の本」や「犬好き」などと省略しても分かるほど話題になっていました。

研究室は、共同指導体制だったのですが、まだ修士論文や博士課程の論文でも、三人の先生方を納得させるのは容易なことではありませんでした。でもそのおかげで、誰か一人の先生のやり方だけを模倣したり、その時々で流行っていることに乗っかる、という誘惑にかられることなく、本当に論じるべきことは何か、を考えさせられました。しかも、フィールドワークの事例を通じて、です。小泉先生がしばしば「還元論」にならないように、と注意していたのも印象に残っています。

林 現代日本の学問史を文化人類学を定点に観測するうえでも、いまの人文が置かれている閉塞状況を考えるうえでも、田沼さんの阪大でのご経験は興味深いですね。ある意味で青木保氏から春日直樹氏へというのは、もうそれだけでひとつのパラダイム転換といって過言ではないんじゃないでしょうか。「わかりやすさ」から「わからなさ」への転換といってもいいかもしれない。「わからなさ」のなかで格闘するうちに目からウロコがどんどん剥がれていく、剥がされていくといったような。しかし現在ではまたそこから「わかりやすさ」にもういちど転換してしまっている感がありますが……。それもかつての「わかりやすさ」よりもっとペラペラした「超わかりやすさ」への転換が生じているように思われます。

ちょっと話がずれてしまって恐縮ですが、私にとっても90年代は思い出深い時期なんです。当時私はイタリア思想が御専門の上村忠男先生のところで勉強していたんですが、先生ご自身は広く知識人論という枠組みのもとで、ヴィーコやグラムシからスピヴァクやヘイドン・ホワイトまでカヴァーするような方でしたし、私自身はラテンアメリカの思想文化研究をやっているというので、ことさら何を指南されるわけでもありませんでしたが、大きな枠組みというか系譜学的な知の地平から、ぼつりぼつりときわめて重要な指摘や批判を受けたものでした。でも正直、指摘されているときには何を言われているのかわからないことも多くて、それからしばらく経ってから、ああ、あのとき言われてたのはこういうことなんだ、と納得することもままありました。むろん不勉強のせいで理解できないんですが、だからといってこちらが理解できるように助けに来てはくれない。勝手に理解しろ、というスタンスで……（笑）

当時はまだ山之内靖先生（社会学）や二宮宏之先生（歴史学）がご存命で、東京外語大のいわゆる「三羽がらす」（山之内・二宮・上村）の先生方の御仕事から刺激を受けながら、同世代やちょっと上の研究者たちとの勉強会のなかで自己成型していくしかなかった。でもそれって、すごく時間がかかるんですね。成果として結実するまでには、1年はおろか2年も3年もかかる。読んだり聞いたり指摘されたりしたことを、いちど自分の中に沈殿させておいて、しばらく醸造させる時間が必要なんです。まあそのままうまく醸造されずに腐っちゃったりすることもしょっちゅうなんですが……（笑） でも、それでいい、と。そういうゆとりというか、いま

風にいえば「バッファ」みたいなものが許されていた時代だったように思います。でも現在では「成果主義」の浸透でその部分が無駄扱いされてどんどん削られてきている。人文学の危機が唱えられて久しいですが、その一番の根源は、知をテクノロジー化して短時間に効率的な「生産」の手だてとしてしまう学問観にあるように思います。

金銭という価値尺度と「本当の友人」

林 話はもとに戻りますが、田沼さんの本のなかでは、キューバでは成人になってなお、バスや映画に行くときには、そのための数ペソだけもらってよしとする、という例が出てきます。映画のなかでも、スペインに移住した後、ごくわずかな金銭を得ただけで満足するカップルの話が出てきます。良い悪いを別にして、キューバの「普通の人たち」のなかには、私たちが属している資本主義システムが自明としてきた金銭的な価値尺度がほとんど、ないし全く存在しないといっている。これはそう断言してしまっていいのでしょうか。まずこの点を確認したいのですが。

田沼 これも、私がいた頃（2002-2004年）と現在ではだいぶ変わってきていると思います。また、私が取えて、そういった人たちを中心に上げたというのもあります。といいますのも、当時、キューバが変わりつつある、という事で日本以外の外国のメディアや人々が注目したのが、まさに、「金にガメつい」「計算高い」キューバ人、というものだったからです。とある旧社会主義国の外交経験者に、「キューバ人か。彼らは金の匂いのするところならどこでも行くだろう」と言われ、「あなたは随分と偏見に満ちた人ですね」と言い返したこともあります。

ですが、マスメディアが取り上げるのは、結局、革命支持者か、彼らとは大きく異なる言動をとる人々か、になりがちです。その中間でモヤモヤしている人たち、というのは、フォトジェニックでもないですし、理解するには細かく長い説明が必要なので、看過されがちなのです。堂々とカメラの前に出てこようとしてもしないですね。

前置きが長くなりましたが、「普通の人たち」に、金銭的な価値尺度がないわけではありません。そもそも、「社会主義」は、まだ貨幣をなくすことができていない段階なので、給与が支払われ、差もありました。ただ、それらは「仕事」(trabajo)の難易度や重要性に応じたものです。価格という面では、生活必需品で政府の管轄の配給品は価格が抑えられている一方、緊急性がなく、品薄で非合法性の高いものほど、高くなります。1993年まで、キューバ人の外貨所持は違法でした。様々な品も、外国人や軍人のみが利用できる店に限定されていました。お金をたくさん持っている事は、資本主義国ではその人の何らかの卓越性を表すと考えられますが、キューバの人にとっては自分自身に対する評価とはあまり関係ない、という感覚があります。単に、状況によって多いか多くないか、使えるか否かが決まってきたのですから。そういった点では、金銭的な価値を人物の価値尺度に用いる、という感覚は、ほとんどないと言えるかもしれません。

林 状況によって金持ちか否か、金を使えるか否かが決まるにすぎない、だから金銭的な価値と人間の価値は全く次元が異なるというのはおもしろいですね。考えてみればさほど特別なことではないのですが、これもちょっといまの日本では考えられません。長者番付に名を連ねることがその人の社会的な価値の裏付けになっているような思考回路が出来上がってしまっ

いますから。ここでもやはりキューバ社会に固有な価値観に驚くとともに、そこと真逆のベクトルにある日本社会の市場的価値観の歴史的特殊性に、あらためて気づかされるという二重の驚きが誘発されます。

ところで、御講演では、デヴィッド・グレーバーを参照しながら、損得勘定を想像することさえ想像しないような「コミュニズム的關係」をキューバにおける「本当の友情」に見て取ることができると述べておられました。そしてこうした価値尺度の不在が顕著にあらわれるのが、たとえば田沼さんのおっしゃる「本当の友情」の人間関係においてだったりはしないだろうか、と私などは考えるのです。たとえば“*Cuentas claras, conservan la amistad*”といった言い回しにまつわる情動を例にあげておられましたが、たとえばそこにみられる人間関係と、資本主義的な価値尺度の不在は、根柢において繋がっている、と。そのあたりはどうお考えでしょう。

田沼 このあたりはちょっと複雑です。グレーバー自身は、現存する社会主義国に関しては、当該国が自らを共産主義国だと規定したことはない、と一蹴して、「コミュニズム的關係」に関する小論では一切、扱っていません。彼の目的は、自分たちの生きる資本主義国や会社のような場でも、過去の農耕社会や牧畜社会でも常にすでにコミュニズムはある、ということを示すことです。しかし、共産主義国だと規定していないとしても、目標にはしているわけです。それが彼らの日常の人間関係に影響を及ぼしているのでは、と気づいたとき、やっと、「友達」とはどういう存在で、誰がそうなのか、ということにこだわるキューバの人々……特に夫のこだわりの背景がわかるように思えました。また、そのような関係が、各自の必要性や能力の不均衡や貸し借りによって、ヒエラルキーや割り切った関係に変質することへの不安や恐れも。

資本主義社会でも、年齢を重ね、社会的な地位が変わると同時に、学生時代の友達との関係性が薄れたり、変わったりすることはありますよね。ただ、それはある程度、避けられないものとして、社会的に位置付けられている。小説や歌の題材にもなったりしているぐらいですから。ですが、キューバでは、そういう変化があることは分かっている、表立ってそれを表現したり、所与のこととして受け入れる、ということに対する抵抗が強い。能力や地位の違いに関わらず対等で、収支決算〔損得勘定〕を考えることすら不快に感じるようなコミュニズム的關係を理想とし、それを期待できる相手が「本当の友人」とであると考えすることは、キューバでは半ば非合法的な「ビジネス」に通じている人でも共有している感覚だと思います。「ビジネス」に関わること自体、恥じるような人たちは尚更です。

林 お話を聞いていて、あるインタビューのなかでグレーバーが提唱していた「コミットメントによる互酬性」という概念を思い出しました³。田沼さんがおっしゃっている「コミュニズム的關係」から議論がずれてしまいそうなのであまり踏み込みませんが、そのインタビューの中でグレーバーは、「コミットメントによる互酬性」を含む「コミュニズム的關係」に触れていて、友人や家族とのあいだでやりとりする相互行為をその関係の例としてあげています。そうした関係では、相手が問題を抱えていればいちいち損得勘定を考えたりせずに手を差し伸べるだろうし、相手も自分が危機に陥ったときには同じように対応するはずで、相手からの返礼をあらかじめ期待して手助けするわけではない。各人は能力に応じて働き、必要に応じて受け取るけれど、なにか完全に等価で釣り合いのとれたかかわりあいがある前提されているわけではな

い。むしろいままで普遍的とされてきた互酬性一般が前提にしているような、完全に等価で均衡した交換といったようなものは永続しない関係でこそ成立する特殊な一形態にすぎないと述べて、コミットメントによる互酬性とそうではない一般的な互酬性を区別しています。

面白い視点だと思いますが、ただ一方でグレーバーのいうコミットメントによる互酬性が発生する状況は、新自由主義が行き渡った現在の資本主義社会では、災害や事故のような非日常性が基調になったときに一般化する現象という気がします。それに比べるとキューバの場合は日常生活にまでコミットメントによる互酬性が浸透していて、たぶんほとんど身体化すらされていて、日常的な快不快を構成するものにまでなっているのかもしれない。いまのお話や「本当の友人」に関する田沼さんの文章からそんな印象を得たのですが、どうでしょうか。田沼さんのパートナーの「こだわり」には、そうしたキューバ独特のというか、共産主義をめざす社会ならではの社会的規範が自然化されていて、人間関係にそれが表れていると言えたりはしないでしょうか。

田沼 今、資本主義社会での「非日常性」とおっしゃられましたが、ある意味、「当たり前の日常生活」というものがないんですね……（笑）

林 うーむ、そうですか、やはりそこらへんのところが私なんかの想像力の限界なんですね……（笑）

田沼 拙著の副題を「非常な日常を生きる人びと」としたのは、もちろん、ソ連崩壊に際してフィデルがこれからは「平和時の非常期間」(el Período Especial en Tiempos de Paz) であると宣言し、実際に訪れた大変な経済危機の時期の呼称を意識しています。しかし、じゃあ、社会主義社会で、「普通の」生活があるかということ、私たちが思うような感覚では「ない」のではないかと。社会主義自体が共産主義に向かうための一段階である、という位置付けがなされているので、その意味で「まだ、あるべき姿ではない」ですし、いっばうで、社会主義では禁止されていたはずの外貨使用や自営業、外資系企業の投資などが認められ、「現在も、本来あるべき姿ではない」と感じるわけです。そのエクスキューズとして、フィデルは「非常期間」と言ったのですが、結局、なし崩し的に続きしかもそれが公共の批判を受け付けずに常態化している。だから、一般の人たちの間では、終わることのない非常事態が日常化した日々を、一定の人と信頼関係を築いて「解決」(resolver) していかないと生きていけない、ということで浸透しているのだと思います。つまり、「コミュニズム」を革命や政府が理念として推進したから、というよりは、革命とともに実現しようとしてうまく立ち行かなくなった関係性を、人々が必要に駆られて実現しようとしているというか。ただ、相手への手助けは必ず返してもらえる、という訳ではなく、こうしたら、相手も困った時に返してくれるだろう、という期待だけで成り立っています。相手がその期待に応えられない時もあるし、応えてくれない時もある。ある意味、毎日が賭けなのです。

林 むしろ切羽詰まった状況のなかで必然的に生じざるを得ない関係と言うべきなのですね。

資本主義的ハビトゥスとキューバン・ディアスポラ

林 ずっと御著書についての話が続けてきたので、このへんで田沼さんが製作したドキュメ

ンタリー映画『Cuba Sentimental』に話を移したいと思います。さきほどまでの話で、キューバ社会の価値尺度は資本主義社会のそれとは違うという指摘がありました。映画に登場したキューバン・ディアスポラの前に立ちのぼる最大の困難も、そのあたりにあるといえるのではないかと。つまり資本主義的な価値尺度が存在しないキューバ社会では「当たり前」だったことが、いったんキューバの外に出ると、まったく「当たり前」ではなくなってしまう。

資本主義システムのなかで構築される人間関係のなかには、目に見えないプラグマチックな損得関係が網の目のように張りめぐらされていて、ブルジョア的なハビトゥスがそこと密接に結びついているわけですが、キューバの「普通の人たち」は、そのコードを読み解くことができない。理念的な規範的振る舞いが先に立ってしまい、損得でやりとりすることを苦手としてしまう。

アリゾナに移住したSさんが移住先で遭遇する戸惑いもそこにあるように思います。映像のなかで、彼女はこんなふうに言っていました。

「ここにはメキシコやその他の国々から人がやってくるけど、みんな資本主義国の出身者。途上国かもしれないし、もっと後進的かもしれないけど、みんな資本主義国からやってきた。でも私たちは他のモノからきた (salimos de otra cosa)。ある実験 (場) から、このシステムに入れられた。」

“salimos de otra cosa”という表現のなかの、この“otra cosa”の“cosa”というのは「システム」と言い換えてもいいでしょうが、「価値尺度」とか「ハビトゥス」と言い換えてみると、移住先のアメリカ社会で彼女が抱えている日常的なコンフリクト、ないしは生き辛さが伝わってくるように思います。salimos de otro sistema, otro habitus y otra escala de valores……。

田沼 そうですね。ただ、“otra cosa”のすぐ後、“salimos de un experimento” (実験から去って) という風に続けているように、「システム」というほど体系だっていない「モノ」というか、「アレ」、というか……。当時、まだフィデル・カストロが存命で退任していなかったこともあり、中国やソ連のように、代替わりしても続くシステム化された体制という感覚は希薄だったと思います。彼女のいう「実験」も、計画立てて検証する、というよりは、革命指導者を中心とした偶発的なもの、というニュアンスが強いと思います。(もっと言うと、その後すぐ、“y nos pusieron en este sistema” というように、いきなり受け身形になるところに、彼女の感覚がよく表れていると思います。もともと渡米は自分で選んだわけでないですが……。)

この時、彼女は一人暮らしだったこともあり、かなり話しこみました。渡米して初めての滞在先だったマイアミの親戚の家に行った際、洗濯機の使い方がわからなくて、手洗いして笑われたこと。バーベキュー・パーティーで集まり、たくさん食べるのに嫌気がさして、誘われても行かないようになると“pesada” (嫌な奴) と言われたこと。彼女は、マイアミのキューバ系アメリカ人のコミュニティの価値尺度やハビトゥスにも馴染めなかったのです。

父親が仕事を見つけたアリゾナに行くと、今度は周囲にいるマジョリティはメキシコ人なのですが、彼女たちが日常的に接する層は教育水準が低く、キューバがどこにあるかすら知らないような人があることにショックを受けます。また、自国にいた時は、敵対的なものであれアメリカに関するニュースは常に入ってきましたし、キューバはアメリカにとってもそれなりの

存在感を持つと感じていました。ところがアメリカではキューバに対する関心すらほとんどないことに気づく。特に、子供の頃から大事だと言われてきた、人のため社会のためになることをしなさい、という教えが、ここでは何の意味も持たない、と、憤慨し、失望していたのが印象的でした。

林 メキシコ人との教育的な落差も、アメリカにおけるキューバへの無関心も、どれもとても面白いですね。とくにバーベキュー・パーティの話は印象的です。消費社会といってしまうばそれまでですが、アメリカ的なパーティの飽食ぶりに嫌悪感を持つというのは、生理的な感覚としてとてもよくわかるんです。田沼さんもアメリカに留学されていたので、このあたりは実感としてお持ちなのではないでしょうか。コストコのような巨大スーパーに車で行って、どう考えても食べられない量の肉や野菜をカートに山ほど買ってきて、次から次へと焼いては残ったものをばんばん捨てていく。あの光景を見ていると、やはりどこか違うんじゃないか、と。自分でもナイーヴとはわかっていても、世界でどれほど多くの人びとが今現在飢えて死につつあるかとか、肉や野菜がここに並ぶまでにどれほどの人の労力や時間が必要だったか考えないわけにはいかない。バーベキューの大量消費＝大量廃棄は、ファストフードやコンビニの大量消費＝大量廃棄、いわゆるフードロスの問題とつながっていると思います。考えて見ればファストフード店もコンビニもアメリカ生まれの経営モデルですよ。

「消費は善である」とする市場中心な経済論理が幅をきかせていて、地球環境や労働環境といった生の現場に根ざした循環の論理はほとんどかえりみられない。そこでは利便性や効率性が至上の価値になってしまっていて、倫理の問題は完全に置き去りにされています。しかも倫理性を思考することそのものが暗黙に禁じられていて、私たちは完全な思考停止に追いやられている。考えることをやめたとき人は人間ではなくなると言ったのはアーレントだったと思いますが、Sさんが“pesada”と受け取られたのは、イケイケどんどんの「全体主義」に倫理的な感覚と思考を持ちこんだから、もっといえば資本主義社会のタブーに触れてしまったから、といえるかもしれません。

田沼 資本主義のタブー、というのは確かにそうですね。私たちはそうした消費やそれを支える労働や売買を「日常」として自然化して見てしまっていますが、キューバではそれが不自然だと教え込まれます。しかし、公式メディアで理想を達成したと報道される自国の状況は、実際は圧倒的に物質が足りず、精神的にも楽ではありません。裏を返せば、出国すれば、こうした問題は解決されるはず、と思っているので、現実の資本主義国の生活を目の当たりにすると、ショックを受けます。でも、それについて批判的に言及することも、国内外のキューバの人たちの間では嫌がられ、一種のタブーとなっています。

ある退職した大学教授から聞いた話ですが、渡米し、毎日ひとりで長距離トレーラーを走らせる親戚の若い男性が、キューバに一時帰国した際、孤独で辛い、と泣いたとき、周囲の人たちの反応は彼を「恥知らず」(descarado)と批判する、冷ややかなものだったそうです。キューバで生活している人からすれば、自分たちにはない自由と富を手に入れたのに、それについて不平をいうなんて、という訳です。

キューバにいる人も、出国した人も、このしんどさは社会主義のせいだ、と思うことによって、

ここではないどこかに希望があると信じて日々をしのいでいるわけですから、ここから出て辛い、ということをするのは、その希望をぶち壊す背信行為なのです。しかも、キューバで誰もが夢見ていたはずの、家族や友人と集い、たくさん食べられることすら楽しくない、ということを出すなんて信じられない、と言うか、もう、「感じ悪い」(pesada) としか言いようがない (笑)

林 故郷を離れて異なる場所で生きることを余儀なくされるというのは、単に言葉や慣習が異なるA地からB地に移動するということではすまないわけですね。A地でもなくB地でもない、その両方の価値体系のさらに外側で生きざるを得ない。またはその間で、狭間で生きることができない。とくにキューバン・ディアスポラの場合、自分が後にしてきた社会と、新たにアフィリエイトする社会のあり方が原理的にラディカルに異なるので、その外部性が際立たざるを得ない。

キューバン・ディアスポラの比較研究の可能性

林 キューバン・ディアスポラとの絡みで、Sさんが言っていた“otra cosa”という表現にもうすこしこだわってみたいと思います。これまでは、キューバ移民について論じられる時には、環カリブ諸国からの移民や、メキシコやグアテマラなど、ラテンアメリカ諸国出身の移民との比較が多かったように思います。つまり移民や難民など、ディアスポラの比較研究は、地理的・言語的な同質性に注目して、たとえば同じスペイン語を使うキューバ移民とメキシコ移民などとの比較や、地理的な近似性に注目して環カリブ地域のディアスポラとの比較研究が多く行われてきた。

つまりこれまでは地理的な括りや言語的な括り、旧宗主国の同質性といった括りが、移民研究では自明視されてきたということだとおもうのですが、しかしそれではさきほどのSさんが直面した困惑や葛藤は見えてこない。むしろソ連などの旧東側諸国や中国といった、言語的にも、地理的にも、文化的にも、歴史的にも共通点を持たない、非資本主義社会出身のディアスポラの比較研究からのほうが、見えてくるものが多いのではないのでしょうか。この点については、講演会がはじまる前の雑談のなかでも田沼さんが触れておられたことでもあります。どのようにお考えですか。具体的に何か例などあれば、それも含めていかがでしょう。

田沼 ソ連が終わる直前の青年たちの感覚と生活について聞き取り調査から明らかにしたアレクセイ・ユルチャクの *Everything Was Forever, Until It Was No More* (邦訳『最後のソ連世代——ブレジネフからペレストロイカまで』みすず書房、2017年)を読んだ時の衝撃は大きかったです。本当に、『Cuba Sentimental』に出てくる人たちと感覚が似ているんですよ。もともと(あまり実益がないのに)高等教育まで勉強を続けたり、共産党青年部にいたような人たちが中心なので、当たり前といえばそうなのですが、どちらも、革命に対して熱心であるかということそうでもない、しかし、しらけているかということそうでもない、というところが……。キューバの小咄クエント(cuento)に対応するものとして、ソ連にはアネクドート(anekdoty)がありました。政治家を茶化す際の笑いのセンスも似ているし、唯一、レーニンだけは笑いの対象としない、という例外があるのと同様、チェが対象外というのも似ています(田沼 2017参照)。

ただ、ご指摘を受けて気づきましたが、旧共産主義圏出身のディアスポラ研究には着目してきませんでした。ソ連・東欧の場合、もう共産党政権が崩壊して時間が経っていたということもありますし、アジアの社会主義諸国も、市場経済を開放され、様々なことが自由化を導入されつつあったので、キューバとは経験が大きく異なる、と思います。

それでも、『Cuba Sentimental』を観た中国人留学生たちからは、彼らの気持ちがよく分かる、というコメントをよく受けます。あそこまで不自由ではない、と留保しながらも、自分たちも、まだ見ぬ何かを求めてきたのだと。先日、指導している留学生が、同じく中国からきて日本の大学院を目指す、あるいはすでに学んでいる同胞たちにインタビューし、日中両国の留学政策をレビューし修士論文にまとめたのですが、キューバとかなりシステムは違うとはいえ、各自が理想を持ち平等であることが認められながらも、それが実現できる状況にない。そうした時、自身を責めるのではなく、自国に見切りをつけ、頑張れば自分が評価され幸せになれる場所に行く、という積極性と、背中合わせの、人並みの生活を送るにはそうせざるを得ない、という切実さが伝わってきました。

林 なるほど、たしかにご指摘のとおりで、ソ連・東欧やアジアの社会主義諸国の経験は、ほとんどもう歴史化されてしまっていますから、古老から話を聞くともではいわないまでも、「すでに終わったこと」として聞くレベルでないと調査できなくなっているというのはよくわかります。1990年代から2000年代にかけて旧東ドイツの「オスタルギー」（東＝オストと郷愁＝ノスタルジーの合成語）が話題になって、『グッバイ・レーニン！』みたいな映画が出てきたりしたわけで、そういう状況とキューバの現在とを簡単に比較できないというのはよくわかります。しかしそのなかでも、映画『Cuba Sentimental』が中国人留学生のなかに醸した共感というのはとても面白いとおもいます。まだ見ぬ何かを求めて、というのは、ありていに言ってしまうと「大きな物語」が幻想としてであれ生きていた社会ということになるでしょうが、やはりそこで生じる共感、共産主義圏出身のディアスポラならではのものといえるでしょうから。はたけ違いの立場から勝手な期待をいわせてもらおうと、歴史的経緯も文化的背景もまったく異なることは承知のうえで、旧共産主義社会出身のディアスポラの比較研究ができると面白いだろうなあとと思います。おそらくそれは同時に資本主義社会を問い直す作業になると思います。田沼さんの御仕事をつうじて今回の対談でも繰り返し再帰＝反省的な思考が誘発されましたが、「他者」の研究はすべからず再帰的な問い直しであるはずですから。

ずいぶん時間が過ぎてしまいました。今回は当初の予想をはるかに超えて、とても深いところまでつっこんだお話を伺うことができました。あらためて田沼さんのご研究の地平の広さと豊かさに触れることができ、おおいに勉強になりました。長期間にわたってバーチャル・トークにお付き合いくださり、本当にありがとうございました。

〈註〉

- 1 自分で自分を監視・点検し、客観的な基準によって自己を診断・評価し、他人に向けて説明開示するよう命じる、アカウントビリティと自己規律化から構成される文化のこと。
- 2 のちに『太宰治を文化人類学者が読む——アレゴリーとしての文化』（新曜社、1998年）に

結実します。

- 3 デイヴィッド・グレーバー『資本主義後の世界のために——新しいアナーキズムの視座』
高祖岩三郎訳・構成（以文社、2009年）

〈参考文献〉

田沼幸子、2017、「カストロとゲバラ、そしてミイラについて」、松戸清裕ほか編、『ロシア革命
とソ連の世紀 3 冷戦と平和共存』、岩波書店、277-278ページ。

（たぬま さちこ 首都大学東京大学院人文科学研究科准教授）

（はやし みどり 立教大学文学部教授）

解説 *Comentario*

ポスト=ポストモダン人類学の可能性に向けて

林 みどり

1. 文化人類学と映像

『Cuba Sentimental』の制作者で文化人類学者の田沼幸子氏の話は初めて聞いたのは、日本ラテンアメリカ学会第38回定期大会の最終日を飾るシンポジウム「キューバ再考：あらたな展望を求めて」においてであった。「書かなかったこと、撮らなかったこと：キューバの人類学的研究について」と題された報告のなかで、田沼は、それまでキューバを対象とする文化人類学研究が扱ってこなかった対象に光を当てたかったからと映画制作の理由を述べた。自身の著書『革命キューバの民族誌——非常な日常を生きる人びと』の表現でこれを言い換えれば次のようになるだろう。ソ連と東欧の社会主義政権崩壊の後、なおも社会主義国家の存続をめざすキューバを揶揄するような欧米の諸研究に触れた後、田沼はこのように続けている。

しかし、私は、キューバ社会がいかに「破綻」しているかを批判するのではなく、キューバの人びとがどのような言葉遣いで自分たちの社会を説明しているのかに着目する。キューバ社会に住む人びとが自社会を説明するための言葉は、外側からの観察者が記述するものとはかなり異なる。キューバに住む人びとは、自社会について論じる際、共有する歴史的物語やイデオロギー、日常生活を経験している者だけが理解できる言葉や枠組みを用いる。こうした言葉や枠組みを共有する人たちを、本書では「文化」を共有する「人びと」の共同体としてとらえる（田沼 2014：15）。

外部の観察者の目から見られたキューバではなく、現地に生きる人びとの言葉や彼らが用いる枠組みに着目する試み。魅力的ではあるが、一見したところナイーヴに見えなくもない研究の構えではあろう。当事者でない人間が当事者になりかわって代弁してしまうという、これまで繰り返し批判されてきた代理表象の陥穽にはまることなく、対象を内側から把持することはどのように可能になるかという問いを、ただちに誘発するからである。だがその問いに答える前に、まず第一なぜ映画なのか、という問いから入ることにしよう。

なぜ田沼は映画を撮るのか。文化人類学の門外漢の目からすると、人類学研究の実践と映画制作の間には乖離があるように見える。映像制作の専門家でもなければフィルム・スタディーズ研究者でもない田沼が、なぜ映像機材を担いでキューバやキューバン・ディアスポラが住む諸都市に飛ばなければならなかったのか。文化人類学者に映像機器を持たせたものは何か。

いうまでもなく、このように問うとき、私の頭のなかには文化人類学者についてのあらかじめの先入見が存在している。文化人類学者と聞いて多くの人の念頭に結ぶ像も、多かれ少なか

れ同じようなものではなかろうか。たとえば、土着化したカトリック聖人像の配置や儀礼次第を京大式カードにせっせと書き込んでいる梅棹忠夫的な人類学者の姿や、京大式カードの「バーチカル・ファイリング」をベースに、「先住民の世界認識」を二次元の図式に落とし込もうとしている研究者といったイメージである。そこで自明視されているのは「書く」主体としての人類学者であって、まちがっても映像を「撮る」人類学者ではない。

思いついたら書き留める。思い起こせば、それが梅棹的「知的生産の技術」の基本であった。60年代末に同タイトルの本が刊行されて以来、人類学の領域を超えて「知的生産の技術」は多くの人びとの心をつかんできたが、まさにそのゆえに、長きにわたって日本の文化人類学像を決定づけてきたのは、「知的生産の技術」を支えている「書くこと」への耽溺だったといえるのではないだろうか。

だがじつは、こうした「書く」人類学者という像は決して普遍的ではない。20世紀中葉に生まれて一世を風靡した比較的新しい人類学者像にすぎない。梅棹的な「技術」も、遅ればせながらその流れに乗ったにすぎない。文化人類学者の箭内匡が述べているように、「映像はいつも人類学に影のように付きまといてきた」のであり、「撮る」ことは人類学と不可分でありつづけてきた(箭内 2014: 7)。カントやヘーゲルの時代の人類学はともかく、現代人類学に限って言えば人類学と映像は切っても切れない間柄にあり、人類学的記述の底には映像資料が埋め込まれているのである。

そもそも現代人類学の起源と位置づけられるケンブリッジ大学の人類学調査隊が、人類学者アルフレッド・コート・ハッドンの指揮の下、遠く何千キロも離れたトーレス海峡諸島まで35ミリカメラと30本のロールフィルムを運んでフィールド調査に挑んだのは1898年のことであった。リュミエール兄弟が映画を発明してからわずか3年後のことである。移動中の損傷や湿度によるカメラ故障が頻発したことから、撮影に成功したのは一部分にすぎなかったようだが、動画撮影技術をフィールド調査に取りこむことによって、人類学は新たな現代の扉を開いたのである。爾来120年。艱難辛苦の末に調査隊が残した初の民族誌フィルムは、いまではオーストラリア政府の「国立映像・音声アーカイブ」サイトや動画共有サイトを通じて、私たちも手軽にアクセスできるものになっている。

もっといえばトーレス海峡調査隊に先立つこと2年、映画がこの世に誕生した翌年には、リュミエールの映画はすでに人類学と結びついていたのである。1896年から数年間にわたって、リュミエール社は「観客のとめどない好奇心に応えるべく」世界各地にカメラマンを派遣し、シネマトグラフの魅力を伝えるとともに、派遣先を撮影したフィルムをリュミエール社に送らせた。派遣された人物のひとりが映像技師で写真家のガブリエル・ヴェールで、メキシコ、日本、インドシナ(現ベトナム、カンボジア)等で撮影した踊りや食事風景の映像を残している。ヴェールの映像作品は、トーレス海峡調査隊のそれに比べると、被撮影者に対する撮影者側の強制力が透けて見える作りになっていたようだが、いずれにせよ19世紀末の最大の発明のひとつである映画が、誕生当初から人類学的な眼差しと縁深かったことはここからも明らかだろう(吉岡・村尾 1999: 201-202)。

遠くの場所の未知の習俗や慣習を映像に残して持ち帰り、自国の観客の好奇心に供するのが

ヴェールの企てだったとすれば、ハッドンの目的は、持ち帰った映像や写真を人類学的情報に読み替えて、その緻密な分析から人類学研究を編み上げることにあった。それまでは一度きりの観察や記憶に頼っていた対象分析が、いまや繰り返し観察・分析したり、目ではとらえがたい「視覚的無意識」（ベンヤミン）の観察まで可能たらしめたのである。ハッドンの調査以降、人類学者がフィールド調査に映像機材を携帯することが常態化したのは自然ななりゆきであったといえよう。

2. ポストモダン人類学と映像人類学

1980年代以降、新たな視点から人類学と映像をつなぐ試みが積極的になされるようになった。しかしその結びつきには19世紀末から20世紀前半にかけての時期にはなかった別の意味が付与されている。1980年代に入ると、人類学の領域には「ライティング・カルチャー・ショック」と呼ばれる大きな「危機」が訪れた。アメリカの文化人類学者ジェームズ・クリフォードをはじめとする一部の人類学者たちが、民族誌を書く営為そのものに先鋭的な意識を向け、人類学的な営為そのものに根源的な反省的問いをつきつけたのである。人類学研究は先進諸国の植民地主義と共犯関係にあるとする人類学内部からの告発や、学問研究がはらむ政治性への深刻な反省的契機がその根にはある。近代学問の知的営為そのものが重大な政治性をはらんでいるとする自己批判は、人類学にかぎったものではなかった。文学、哲学、社会学、宗教学など、人文社会諸科学の広大な領域で問い直しがなされ、ディシプリンを横断した検証や批判がダイナミックに展開されて、人類学研究は文学理論や現代思想といった他領域からの検証や批判にさらされた。この時期の人類学は「ポストモダン人類学」と呼ばれるが、田沼はその荒波をもちに受けることから文化人類学の研究を始めなければならなかったのである。

加えて、田沼の場合、対象フィールドをキューバに定めたことによって、ふたつの課題を背負うことになった。まず第一に、上述したポストモダン人類学に普遍的な課題。対象とする「他者」を表象する過程で、いやおうなく生じる権力作用をどのように回避することができるかという問題である。第二に、キューバ研究に固有の課題。「あらゆる事象を政治に還元し説明する」というポストモダン人類学の傾向は、ことキューバ研究について見たとき、研究対象とするキューバ政府の公的言説を補強し、ポストモダン人類学が解体を目指しているはずの「大きな物語」（たとえば「革命」）を支えるものになってしまうという、深刻なねじれの問題である（田沼 2015：23-24）。これらふたつの課題は、それぞれまったく意趣を違えるものではあったが、ポストモダン人類学の嵐のなかでキューバ研究を行う以上、避けるわけにはいかないものだった。それを解決する一助として田沼が着目したのが映像だったのである。それも人類学的な観察と記述のための補助的手段としての映像ではなく、映像そのものが民族誌であるような映像＝人類学の実践である。

映像というツールを選んだ理由について、ある論文のなかで田沼はつぎのように述べている。

筆者はポストモダン人類学の影響から「似た者」を他者化せずにとらえることを試み、さらに〈正しい言説〉に奉仕するドキュメンタリーに抗するため、映像作品のなかで彼ら

の言葉を直接聞く経験を再現することを着想した。言い換えれば、キューバの市井の人びとを、革命という「大きな物語」に回収しようとする従来の映画やニュース映像、民族誌に対するカウンター・ナラティブとして拙作を構想した（田沼 2015：23）。

そもそも人類学を人類学たらしめているのは、外部的な存在を「異なる者」として他者化しとらえる視座にある。西谷修はその視座によって構築される世界観の歴史的基点を、ルネサンス期の西洋世界における「人間」概念の二分化——フマニタスとアントロポスの二分法の成立——に見てとり、前者による後者の「知的生産」のうちに近代諸科学を規定してきた知の暴力的構造を探り当てている（Nishitani 2006：259-273）。知の主体フマニタスによる「知的生産」の土台を構築しているのが、フマニタスによる「^{アントロポス}アントロポス^{ポロジ}についての学」であるからには、人類学が他者化の眼差しを内在させる構造は避けがたいものであった。

繰り返しになるが、他者を大文字の他者として規定し、その習性や慣習を観察し叙述する知的営為は、どれほど緻密な研究であろうと、他者を知の権力によって支配し、自己の知によって囲い込み消費する権力行使に他ならない。その構造を内破するためには、民族誌のなかで「語るのは誰か、書くのは誰か、いつ、どこで、誰と一緒に、あるいは、誰に対して、また、どのような制度的制約や歴史的制約のもとで書かれたのか、話されたのか」が、まず第一に明らかにされなければならないし、そもそもそこで「わかりやすい」ものとして滑らかな書かれ方をされている民族誌からはいったいどのような欲望や混乱が取り除かれているのか、その民族誌のテキストとしての「客観性」なるものはどのように創られているのかが問われなければならない（クリフォード 1996：22-24）。ポストモダン人類学は、民族誌のテキストにおいて透明化されてきた知の暴力や学問の権力性を暴き出し、問いへと投げ返そうとするものである。

しかし田沼は、そもそも自分とは「異なる者」として他者を規定したり位置づけたり観察するのではなく、自分と「似た者」として捉えることから出発しようとする。映像は、そのために選び取られた究極のツールなのだ。じっさい『Cuba Sentimental』では、撮影者のサチ（田沼）は被撮影者である友人たちから問いかけられ、からかわれ、彼らを眼差すだけでなく、彼らから眼差される存在でもある。またときには観察しているはずの当の撮影対象から、撮影者である自分の立ち位置を問い返される存在にもなっており、伝統的な他者化表象を期待して映像のこちら側にいる私たちを居心地の悪いものにさせてしまう。この居心地の悪さが、田沼の戦略の一部であることはいうまでもない。

民族誌的フィールドワークは、研究対象の社会に1年から2年ないしそれ以上滞在し、そこでの人びとの日常生活に入り込みながら、さまざまな出来事や物事の自然な成り行きを重視しながら行うこととされている。そこでは「研究対象の社会における人びとの日常的行為や言葉遣い、人間関係のあり方、物事の連関といったものを、知的に理解するだけでなく、人類学者自身が（一定の範囲内で）身体的にも同化する」ことが求められる（箭内 2014：13）。田沼の映画のタイトルが“Sentimental”となっているのも、おそらくはそこに理由がある。

ある部分で田沼自身言っているように、「日常生活で、彼らがなにか事を判断する際、「感情（*sentimiento*）」は非常に大きな位置を占めていると感じていた」（田沼 2015：24）。感情や情動

といったものは合理的な判断には従わない。合理性に抗って、ほとんど身体的な反応として現出する。それを感知するためには、「一定の範囲内で」の身体的な同化の経験が不可欠になってくる。完全に同化するのではなく、しかし完全に他者化するのでもないしかたでのみ、こうした「感情」の機微をすくいとり、かたちにしていくことは可能になる。

ポストモダン以降の人類学者に求められているのは、全的な同化でもなく他者化でもないしかたで関係性をとり結ぶことのなかから研究を紡ぎ出していくことである。あるひとつの「エスニック・マイノリティ」とか、「部族」や「クラ」とか、「〇〇村」といった括りでは見えてこないもの、たとえばグスターボやホアンやエリサといった固有名をつうじてでなければ見えてこない感情の抑揚を手探りでたどること。映像に出てきた人びとや、その周辺にいる人びととの親密で緊密な、ときには緊張感に満ちたやりとりのなかから様々な感情の〈声〉を紡ぎ出すこと。それはたしかに撮影者からの呼びかけがあって初めて返ってくる〈声〉かもしれないが、必ずしも撮影者の当初の意図に沿うものではなかったり、撮影者には理解できない〈声〉であったりする。じじつ映像には、脇に逸れていたり、言い淀みや沈黙で途切れてしまったり、怒りや悲しみで混沌となった〈声〉も入り込んでいる。ときには撮影者＝サチの目と耳を通して、観ている私たちに投げかけられる厳しい問いかけにもなっている。

さらにこれらの映像は、彼らを一方的に撮るだけではなく、彼らによって観られ、批評され、キューバや移住先の被撮影者の応答や反発を生みだし、それがまた入れ子状に映像に記録されている。おそらくその記録はふたたび彼らによって観られ、批評され、それへの応答が記録される宿命にある。映像をひとつの屈折面に、撮影者と被撮影者は互いに折れ込みあい、重なりあうのである。

田沼の文章には、とても美しい表現がある。

——「他なるもの」の記録から、「似たもの」の出会いへ（田沼 2015：34）。

「似たもの」の出会いがかもす複数の重層的な〈声〉からは、ポストモダン人類学を経たポスト＝ポストモダン人類学の胎動が聞こえてききはしないだろうか。

〈参考文献〉

- クリフォード、ジェイムズ、1996、「序論——部分的真実」ジェイムズ・クリフォード&ジョージ・マーカス編、『文化を書く』、紀伊國屋書店。
- 田沼幸子、2014、『革命キューバの民族誌——非常な日常を生きる人びと』、人文書院。
- 、2015、「〈人類学的〉映像の生成——『Cuba Sentimental』の事例を通じて」、『文化人類学』、第80巻1号、20-37ページ。
- Nishitani, Osamu. 2006. "Anthropos and Humanitas: Two Western Concepts of 'Human Being'", in Naoki Sakai and Jon Solomon (eds), *Translation, Biopolitics, Colonial Difference*, Hong Kong: Hong Kong University Press, pp. 259-273.
- 吉岡健司・村尾静二、1999、「映像人類学作品解説」、伊藤俊治・港千尋編、『映像人類学の冒険』、せりか書房。
- 箭内匡、2014、「人類学から映像——人類学へ」、村尾静二・箭内匡・久保正敏編、『映像人類学——人類学の新たな実践へ』、せりか書房。

（はやし みどり 立教大学文学部教授）